

まえがき

「折しも燃え盛る夏の高校野球、テレビ観戦のさなか、PL学園の桑田投手が打席に立ったときスタンドの女子生徒達からけたたましい声援が飛んだ。横にいた息子(高三)が思わず、『すごいなあ、黄色い歓声が』と言ったものである。」

思い出しても懐かしい。この一文は、1985年、カラー・ピラミッド・テストの我が国初の標準化をなし終えた直後、ある雑誌に書いたカラー・ピラミッド・テストの紹介文の出だしですが、ここで“黄色い歓声”とは、言い古された表現とは言え、若い女性の興奮を伝える言い得て妙な色彩感覚的な言葉です。

私たちは、ときに様々な思いや感慨を、色彩感覚的に表現します。バラ色の人生、ブルー・マンデイ、灰色の青春……。こうした表現がいかにもぴったりふさわしい感じがするのも、私たちの毎日が、意識するとしないとに拘わらず、常に色彩世界の中で息づき、それから大きな影響を受けてきたことの証です。

家があれば、壁面の絵画・写真、家具、カーテン類など、すべて彩りの中であり、外に出れば、街路樹や公園の草花、行き交う人の衣服・装い、店頭に立ち並ぶ諸々の商品、はては夜のネオン街など、みな色とりどりの色彩であふれています。なかには不快な感情を催すものもありますが、多くは私たちの目を楽しませ、心を和ませ、さらには山紫水明の自然の景観、美術工芸の名品の数々など、魂に触れて感動の極いざなみに誘ってくれたりもします。私たち人間の生活にとって切っても切り離せない、魅惑的な色彩の世界——。その色彩刺激を媒介としてパーソナリティの特性や構造に迫ろうとするのがカラー・ピラミッド・テストです。

本書、好嫌式カラー・ピラミッド・テストは、好ピラミッド(気に入ったピラミッド)と嫌ピラミッド(気に入らないピラミッド)という二つの対称的な条件下のピラミッド反応を通して、パーソナリティの意識的側面から潜在的・無意識的側面にまでアプローチする奥深い投影法検査です。しかし、大変遺憾なことに、興味深くはあるけれども、あまりに身近な色彩という媒体を用いる簡潔なテストであるために、ときどき大きな誤解を呼びます。一つは、ロールシャッハ・テス

<カラー・ピラミッド・テスト入門>

トなども含めて色彩を用いるテスト一般を指していますが、そんな簡単なもので、本当に心理学的な心理検査たり得るだろうか、というものです。これは同じ心理学領域の人でさえ持つ疑問です。かつて、西川好夫氏がその著『色彩心理の話』（1976）の中で、「要するに、色による性格の診断は、現在のところ、座興としてはとにかく、科学的にはまだムリがあるといわざるをえないようである」と述べています。二つ目がそうです、テストとは言い条、カラー・ピラミッド・テストを易・占いのたぐいに見紛うことです。昨今、カラーコーディネートやカラーセラピーなど色彩関連分野の流行に伴い、その方面からもこのカラー・ピラミッド・テストに対する関心が生まれ、インターネット上では幾つもの関連ページが見られるようになってきました。しかし、よくよく眺てみると、残念ながら、カラー・ピラミッド・テストを易・占い、座興程度のレベルでしか見ていないものもけっして少なくありません。

こうした誤解は、いったいどこからきているのでしょうか。様々な原因が考えられますが、詰まるところそれは、先述しましたように、カラー・ピラミッド・テストがあまりに身近な色彩刺激を手がかりに行われる簡潔なテスト構造から成り立っているために、本テストを浅く安易に捉える謬りに導き、芯から理解しようとする試みをなかなか生じさせにくいということに因っています。そしてさらにその因^{もと}を探ると、カラー・ピラミッド・テストを正しく容易に理解することができるマニュアルが未だ存在しないことに行き着きます。

私たちは、長い間、カラー・ピラミッド・テストの正しい普及のために、分かりやすい入門書を世に出したいと切望していましたが、様々な事情がその実現を拒んできました。しかし、もはやこれ以上手をこまねいている時ではなくなりました。このたび、奮起一番、正しく深く、分かりやすくをモットーに、また、後続の研究者が生まれることをも願いながら、本書の刊行を決意しました。「カラー・ピラミッド・テスト」を愛する方々へ、この『カラー・ピラミッド・テスト入門』を心より捧げたいと思います。

2011年 春

宗内 敦・宗内 美映子